

発見されたヘッベルの詩

„Zum 18. October 1835“について

奥 村 淳

(教養部 独語研究室)

ヘッベル (1813-1863) は1835年10月19日に日記に次のように書いている。「ハンブルクの検閲当局は目下、謎々や文字謎の答も提出されなければならないと命令している。このことは多くの謎を解くと思う。」(T.106)⁽¹⁾「検閲官ホフマンは私の詩 „zum 18 Oct: 1835“ が提出された時、怒って印刷屋に突き返し、〈あのご婦人 (ショッペ女史) はどうして私がこんな詩を通すと思うのだ。〉と言った。」(T.107) ヘッベルは1835年2月に北ドイツの故郷ヴェッセルブーレンを去り、ハンブルクで大学入学資格を得るための勉強をしていた。ハンブルクのジャーナリストで作家のショッペ女史 (1791-1858) の尽力によるものであった。ハンブルクがよく知られた検閲官ホフマンによって不許可にされたヘッベルの詩 „zum 18 Oct: 1835“ は、ヴェルナーによれば「残されていない」⁽²⁾はずであり、特に問題とされたこともない。しかしヘッベルはすでに故郷の教区長の家での書記時代にいくつもの自由を求め、時代の反動的な動きに反対する「政治詩」(Br.I,S. 20) を発表していたのであるから、⁽³⁾恐らくは政治的な内容のものと想像される „zum 18 Oct: 1835“ は関心をひくものがある。ヘッベルと同年に生まれたデュヒナーが逮捕を避けてフランスに逃れたのが1835年3月のことであり、12月には若いドイツが活動を連邦議会の決議によって禁止される。このように緊迫した時代状況がヘッベルにいかなる影響を与えたかということを知る上で、この詩は重要な資料となるはずである。ところが近年、この詩とおぼしいものがヴェッセルブーレンのヘッベル記念館のヴェルハウゼンによって偶然発見され、⁽⁴⁾その後元ヘッベル協会会長シュトルテによって簡潔に「これまで行方不明のヘッベルの詩」⁽⁵⁾と認められるに至ったのである。そこで以下においてはこの詩をヘッベルの作とすることの妥当性も含めて検討しつつ、時代とヘッベルのかかわりを探り、ヘッベル像の転換を試みることにする。

発見された詩の表題は „Zum 18. October 1835“ であり、副題として、 „Ein lauter Klang zu vielen stillen.“ と付加されている。それに続いてウーラントの詩 „Am 18. Oktober 1816“

の第1節が „Motto“ としてかかげられている。ヘッベルの詩そのものはこのあとに始まり、最後に K.F.Hebbel と書かれている。

ナポレオン戦争さ中の1813年3月にプロイセン国王ヴィルヘルム3世は逡巡の末フランスに対して宣戦を布告し、自らの国民に対しては有名な „An mein Volk“ を発表した。それは「我々の存在、独立、安寧」⁽⁶⁾のための決定的な戦いへの参加を呼びかけるものだった。この呼びかけは大きな反響を呼び、プロイセン軍は愛国的な熱狂にかられたドイツ全土からの義勇兵でおよそ5倍にふくれあがる。こうして1813年10月16日から19日にかけてライプチヒ近郊においてプロイセン、オーストリア、ロシアの連合軍とナポレオン軍の間の諸国民戦争に至ったのである。この戦いで連合軍は勝利を収め、決定的な戦いがなされた10月18日は「ドイツ解放の記念日」⁽⁷⁾として祝われることになった。しかし1815年6月にヴィーンで結ばれた連邦約款第13条の憲法の約束は中中果されなかった。解放戦争に参加した人々は「国王ではなく祖国に誓いを立てた」⁽⁸⁾のであったから、各国で君主の裏切りに対する国民の怒りや不満が高まる。事情はウーラントの祖国ヴェルテンベルク王国でも同じで、長く憲法紛争が続くことになる。ウーラントは1815年に祝宴の席上で „Am 18. Oktober 1815“ を公表したのに続き、1816年にも „Am 18. Oktober 1816“ を作る。この詩においてウーラントは君主達の恥辱を救い、「当然の権利のために血の代償を払った」⁽⁹⁾国民に対して約束を実行し国民を「自由な人間」⁽⁹⁾とするように要求している。2つの詩は1816年に匿名で出版されたウーラントの詩集 „Sechs vaterländische Gedichte“ に含まれ、1831年に増補して出版された „Vaterländische Gedichte von Ludwig Uhland“ の Nr.1 と Nr.6 とされている。とりわけ1816年の詩は1848年に国民議会の代表に選ばれたウーラントのためにフランクフルトで松明行列と共に歌われることになる。ハイネも „Französische Zustände“ の „Vorrede“ (1833) の中でプロイセン国王の約束違反をとがめ、国民に対して自由のかわりに「証明書つきの奴隷の身分」⁽¹⁰⁾を与えた元凶として批判したが、この「ラジカルな」⁽¹¹⁾ „Vorrede“ の日付が1832年10月18日となっているのは、意図的なものと言うことができるのである。ウーラントの „Am 18. Oktober 1816“ はウーラントの詩の中で「もっとも美しくラジカル」⁽¹²⁾とされる。解放戦争で倒れた勇士の「霊が今日天から降りて来たら、……剣の一撃の如く痛烈な歌」⁽¹³⁾を現状にあきればてて歌うだろうというウーラントの詩の第1節を „Motto“ とすることの意味は明らかである。

ヘッベルの発見された詩 „Zum 18. October 1835“ の第1節では人々が再び人権を失って奴隷となってしまっているのに、「君主の良心はめざめないのか」⁽¹⁴⁾と問われる。第2、第3節では10月18日の祝祭の中止が求められる。解放戦争の勇士達が祝祭のにぎやかな様子を誘われて天上から降りて来ることのないようにという理由からである。勇士達が天上から降りて来て、自分達の流した血がどんな実を結んだかを見ようとしても、種は虫に喰われていて、「夜がますます深まりつつある様子」⁽¹⁵⁾をまのあたりにするならば、あきればてて絶望するだろう。

連邦約款第13条の約束が実行されていないのに10月18日を祝うとは「彼等にはもう君達の考え方がわからないだろう。」⁽¹⁶⁾第4節ではナポレオンが新しい任務のために神によって呼び出される。「ナポレオンは高潔な怒りの身ぶりをしながら、／今や黙して我々の間を世界の裁き手として通って行く。」⁽¹⁷⁾しかし第5節ではナポレオンは勇気を失わない人を軽蔑することはないといわれる。それ故人はナポレオンに恥じまいとするならば剣を鳴り響かせる必要がある。またナポレオンがこうにして身分の高い人々の所を通りかかると、彼等が「我々に当然のものを返還するという／人間らしい欲求を感じる。」⁽¹⁸⁾ことさえ起こるかも知れない。ナポレオンの新しい任務とは約束を実現させることに他ならないのである。

ヘッベルは生涯ナポレオンに関心を寄せ、ドラマ化ももくろんでいた。1836年には夢の中でナポレオンはヘッベルに「ハイネの „Reisebilder“ 第2部をどう思うかと尋ねた。」(T. 416)という。 „Reisebilder“ 第2部の中でも „Ideen. Das Buch Le Grand“ で示されているナポレオン像は、「復古時代に反封建主義の革命と同じことを意味する」⁽¹⁹⁾ナポレオン像に他ならない。その第10章ではナポレオンはいわば至高の存在とされていて、「その唇が口笛を吹くだけで——かくてプロイセンは失せぬ、となり……」⁽²⁰⁾などと反プロイセン、反メッテルニヒ体制の象徴となっている。1851年のヘッベルの日記に「ナポレオンと公教要理。世界を変え、新しい法律を与えるためにのみ出現した個人。これまで世界をひとつにまとめてきた法律をどうしてこの個人が尊重できるだろう。」(T. 4887)とあるように、ヘッベルにとってナポレオンは「時代の進歩的な精神」⁽²¹⁾を体現していたのである。ヘッベルはこのようなナポレオン観を „Zum 18. October 1835“ の第4、第5節で示していることになる。

„Zum 18. October 1835“ の最後の第6節は次のようなものである。

君主達よ、神聖な戦いは終わった、
君達を……
自由のための熱狂が救ってやった——
救いの女神を牢の中に寝かせるとは
何という悪魔のしわざが君達の眼をくらませてしまったのか。
大いなる現代の意味を把握せよ。
君達が褒賞を拒否し、
自分の力で獲得したのだなどと言うなら、
国民は2度と熱狂しないだろう。
消えてしまうだろう、生のもっとも純粋な炎は。
さあ、最高の名声を我が物とすべく努めよ、
いつかますます夜が深まった時、

君達のせいだと子孫に言われる事態にならないように。⁽²²⁾

「褒賞」とは連邦約款第13条の約束の実行である。現在の君主達が「子孫」によってうらまれることになる事態とは言うまでもないだろう。また「夜」とは「Vormärzの政治的メタファー」⁽²³⁾では「専制政治」⁽²⁴⁾を表わす。ヘッペルはこの言葉を用いてプロイセンを主要な柱の一本とする反動的な復古体制に反対し、自由な憲法の実現を要求する自己の立場を明らかにしているのである。このことはプロイセン、ハンプルクそしてヘッペルの属したホルシュタイン公国の実情を見るならばいっそうはっきりするのである。プロイセンは1848年まで「憲法のない国家」⁽²⁵⁾であって、議会の権限は極めて制約されていた。ハンプルクは共和制とはいえ古い憲法のままで、28人からなる評議会が圧倒的な権力を握っていた。評議員に選ばれ得るのは全住民の3～4%の「豊かな商人の一族」⁽²⁶⁾だけだった。前世紀以来の憲法が改められるのは1860年のことになる。またホルシュタイン公国はデンマーク王国に属しつつドイツ連邦に加わっていた。ここで1830年代初めに憲法運動を機に与えられた議会は、デンマーク国王自ら言明したように「プロイセン議会を手本」⁽²⁷⁾としたもので、助言する権限しかなかったのである。連邦約款第13条の約束違反をとがめることがとりわけプロイセン批判を意味したことは当然であるが、プロイセンは「特に強くザクセン、ハンプルクそしてデンマークの検閲体制に介入した。」⁽²⁸⁾という。„Zum 18. October 1835“のような詩が許可されるはずもなかったのである。

10月18日は解放の記念日であると同時に1817年にヴァルトブルク祭が開かれた日でもある。ヴァルトブルク祭は宗教改革300年を記念すると同時に「連邦約款第13条の神聖な約束の実現」⁽²⁹⁾を求めるものでもあった。その翌年1818年10月18日にはイエーナにおいて全国ブルシェンシャフトが結成され、1819年5月にはブルシェンシャフターのザントがコッチェブーを殺害する。その結果メッテルニヒの指導で「ドイツの平和と安寧の維持」⁽³⁰⁾を図るという名目のもとに、1819年9月にカルルスバート決議がなされた。それは20ボーゲン以下の本の事前検閲など大幅な検閲強化を定めたものだった。プロイセンは決議をはるかに越え出て、すべての印刷物（名刺、切符のたぐいまで）に事前検閲を定めたが、その日付が1819年の10月18日であるのは政府の強い意志がこめられているわけである。ハイネが„Ideen. Das Buch Le Grand“の第12章を検閲削除を装って「ドイツの検閲官は……ばかだ……」⁽³¹⁾というわずか2語から成立させたのは、規則を逆手に取った風刺に他ならない。カンペ書店から20ボーゲンを越えて出版されたこの本は、むしろ事後検閲によって禁止されてしまったのである。

ハンプルクでは評議員を長とする検閲委員会が設けられ、その下で1848年まで検閲官をつとめたのがF.L. ホフマンである。このようなハンプルクの検閲体制に反抗した人に郊外ゲオ

ルク教区の牧師 L.W. ラウテンベルクがいた。ラウテンベルクはのちにはハンブルクの救護施設 *Raues Haus* の創設にもかかわった人である。彼は1829年10月18日の祝祭への市民の無関心を嘆き、参加をうながす説教テキストの検閲について委員会に異議を申し立てたが、不首尾に終わった。ハンブルクではこの記念日は「盛大に祝われ」⁽³²⁾、市立劇場では長いこと記念公演がなされたという。⁽³³⁾しかしハイネが „Aus den Memoiren des Herren von Schnabelewopski“ (1834) で皮肉っているように、ハンブルクの市立劇場の観客は劇場を教会にしまいかねない「良い市民」⁽³⁴⁾ばかりだったのである。「良い市民」とは約束の実現など必要のない豊かな支配階級のことである。一般市民に対し10月18日の意義を思い出させようとして検閲に阻まれてしまったラウテンベルクは、ハンブルクのことを皮肉まじりに「賞賛される共和国」⁽³⁵⁾と形容したのであった。ところがラウテンベルクはこの前年1828年9月にハンブルクの支配体制の変革をうったえる説教テキストの印刷にまふと成功していたのである。このテキストは教区の人々が自分達の権利の擁護者を自分達の中から選ぶことのできる日を待望するという内容を含むものだった。それはたとえ太陽が雲の背後に隠されていても、「太陽は雲と夜を打ち負かしてきた。皆さんの朝も来るであります。」⁽³⁶⁾といった挑戦的な内容を含むものだった。このようなテキストに印刷許可を与えたのはホフマンのうっかりしたミスであった。ホフマンは「現行の秩序に対する挑戦」⁽³⁷⁾を看過したとして、検閲委員会から叱責され解職もほめかされたのである。ハイネが „Der Salon“ 第2巻 (1835年1月) で「もし私達が……〈女房が子供を生んだ、女の子だ、自由みたいにすてきな〉と書こうとすると、ホフマン氏は赤ペンで〈自由〉を消してしまうのだ。」⁽³⁸⁾とその權威をやゆしたホフマンにとって、10月18日とはラウテンベルクについての苦い記憶と結びついた特別の日だったのである。またハイネと同じくラウテンベルクのような「憲法発展の停滞あるいは当時の復古的傾向と戦闘的に」⁽³⁹⁾戦っていた人にとって、10月18日は「メッテルニヒ体制に対するもっとも辛辣な嘲笑」⁽⁴⁰⁾の手段だったのである。

1830年の7月革命に際してはハンブルクでも8月末から9月初めにかけて騒ぎが生じた。その後シェーネなる人物が騒動の時の一種の聞き書き集 „Die Rechte und Forderungen der freien Hamburger“ を無署名で発表した。シェーネは解放戦争においては有名なプロイセンの義勇軍 *Lützow* 軍に将校として参加し、数年前からハンブルクに居住していたのである。シェーネは聞き書き集の中で、騒動の際に市民が受けた被害に対する補償や言論の自由を求めたのであるが、特に「権力は強い。しかしそれは熱狂と正義と男らしい意志には弱いのだ。」⁽⁴¹⁾と書いたことが当局の怒りを呼び、シェーネは国境を越えた捜査の結果9月末に捕えられたのであった。無名の庶民といえるシェーネは体制の「見せしめ」⁽⁴²⁾として、懲役1年の実刑とその後のハンブルク追放の判決を下されたのである。最初に原稿を持ち込まれた出版者カンベも、出版しなかったにもかかわらず、密告をしなかったことを理由に罰金100ターラーを課せられる。

シェーネは服役後反省文を提出し、ハンブルクの妻子のもとへの帰還を願い出たが、それも却下され、まもなくベルリンで死んでしまう。ベルネの„Briefe aus Paris“（1831）出版の故に法廷に立たされたカンペが、「ドイツなかんずくハンブルクの言論のおかれた全く法的権利のない状態」⁽⁴³⁾に抗議したように、ハンブルクでは「いささかでも政治的に反対する方向は芽のうちに」⁽⁴⁴⁾摘み取られたのである。

ヘッベルがハンブルクで勉強するにあたってはショッペが何人かの金銭上の後援者を見つけてくれていた。その中にハンブルクのワイン商ヴィルヘルム・ホッカーとその父がいた。ヘッベルと同じ年の生まれであり、ショッペの新聞に詩も発表していたホッカーには、„Die Fürsten nach dem Befreiungskrieg“という詩がある。この詩は「ああそれなのに、皆さん、万事は昔のまんま、／約束の何が守られたかい。」⁽⁴⁵⁾と連邦約款第13条に対する君主達の約束違反をとがめるものである。ハンブルクの大なり小なりのまちがった状態を攻撃するホッカーの詩は「ハイネも評価し」⁽⁴⁶⁾たのであった。しかもホッカーは1835年早々に„Der Maskenzug — eine Vision“でハンブルクの支配階級を嘲笑し、2週間の拘留刑を受けたばかりだったのだ。ホッカーは1843年10月18日にはある会合で、「ひとつのドイツというこの世でもっとも素晴らしい国」⁽⁴⁷⁾を待望する演説を行なう。シュトルテの論文の表題にあるように「詩人で反逆者」といわれるような人間にとって、10月18日は特別な意味を持つ日だったのである。

ハンブルクでは1846年にも10月18日の祝祭が問題を起こした。この年の祝宴は盛大で1千人の人々が集まったという。当時こうした祝宴は政治的な集会のかわりをなしていたが、1千人も集まったということは1848年の2月革命に向かった時代の高まりが感じられる。祝宴ではヨハネーウムのヴルム教授を初めとして「リベララー改革的な思想」⁽⁴⁸⁾の人々がくり返し、「ドイツの統一と自由」⁽⁴⁹⁾を求める演説を行なった。この模様を伝えたハンブルクのある新聞の記事„Das Festmahl am 18. Oktober“の中で、ユダヤ人解放家として知られたガブリエル・リーサーの演説の内容が評議会の怒りを買ったのである。リーサーは連邦約款第13条の約束の実行と言論の自由を求めたのであった。ハンブルクではその少し以前から検閲官がホフマンを含めて2人制となっていて、この記事を許可した新任の検閲官グレーザーは強く警告され、再度過失を犯した場合の解職を通告される。検閲官は祝祭の記事について「特別の注意」⁽⁵⁰⁾を払うよう指令されていたという事実は、ハンブルクにおいて10月18日が体制の中枢に触れる問題だったことを物語っている。

2

ハンブルクに出たヘッベルは1835年3月から日記を書き始める。ヘッベルはギムナジウムのヨハネーウムの授業に出席し、ノヴェレや詩も書く。5月には友人と共にメールヘンの年鑑

の出版をもくろむ。そして6月9日付の故郷の友人宛の手紙によると「もう大分前から政治的・批評的な雑誌の出版」⁽⁵¹⁾を計画しているという。しかもそれは芥子の利いたものになるはずで、「検閲官は胡椒が多いと食べることができない」⁽⁵²⁾などと検閲を意識していることは注目される。さらにヘッベルは5月にギムナジウムのヨハネーウムの生徒のクラブ「1817年の学術協会」に入会する。このクラブでは会員が意見を発表し、互いにそれを批評しあうことが行なわれていて、ヘッベルも11月に脱会するまで多くの手書きの批評文や論文を残している。協会では解放戦争の愛国詩人テオドーア・ケルナーに人気があって、ヘッベルの入会直前にもケルナー論が発表されていた。ヘッベルの入会后6月にもある会員がケルナーの愛国詩を賞賛し、会員を「自由と祖国のための戦い」(W.IX,S.430)へあおろうとした。ヘッベルはこの論文を批判して、詩人の目的を「生の謎」(W.IX,S.22)の解明であると規定したのである。当時はケルナーの全集が発売されたばかりで、のちに4巻本に拡大されるこの全集の編者はプロイセンの高官カルル・シュトレックフースである。シュトレックフースは全集の序文で解放戦争におけるプロイセンの役割を自賛し、現代の改革を求める人のことは「フランスの例にならって転覆の上に自由を築こうとする気違い」⁽⁵³⁾と罵倒したのである。ハンバッハ祭の中心人物で、パリに逃れていたヤーコブ・ヴェネダイが „Preußen und das Preußentum“ (1839)で、「反自由の精神はプロイセンが生み出した。ドイツ国民がめざめたらプロイセンは没落するだろう。プロイセンの国家組織の目的はひとつしかない。国民のための美名のもと、特権的少数による大多数の国民の搾取、衆愚化そして奴隷根性の植えつけである。」⁽⁵⁴⁾と批判した時、プロイセン政府は公正であると強弁して反論したのがシュトレックフースである。ヘッベルは「ケルナーのきまり文句の時代」⁽⁵⁵⁾といわれる時代の反動的な空気に異をとなえているのである。ヘッベルは7月に会員の „Was ist Vaterlandsliebe?“ という論文を批評して、愛国心を排他精神のひとつとしてしりぞけ「今の国家組織こそ世界を圧迫する最大の悪のひとつなのではないかという大きな疑問」(W.IX,S.30)も提出した。これは大胆な問いかけである。

協会に残されたヘッベルの唯一の論文は „Über Theodor Körner und Heinrich von Kleist“ である。7月末に発表されたこの長い論文でヘッベルはドラマとしては、まずケルナーの人気を呼んだ悲劇 „Zriny“ (1812)を取り上げている。このドラマは「皇帝と祖国に対する絶対的な服従」(W.IX,S.48)を賞揚するものであり、結末で全員が壮烈な死を遂げる。しかしヘッベルは「気をつけよ。彼等は君みみたいな弱虫とは関係ないのである。」(W.IX,S.54)と書き、この悲劇の現代における意義は否定したのである。そして逆にヘッベルはクライストのドラマ „Prinz Friedrich von Homburg“ で示されるホンブルクの心の動きを「真に心理学的」(W.IX,S.44)として高く評価する。ティークが1821年にクライストの作品集 „Hinterlassene Schriften“ を出版した時、ゾルガーはこのドラマについて「我々に対し常に愛国心とひきかえに売られる中味のない大言壮語とばかげた忠誠心とは何か別の物である。」⁽⁵⁶⁾と述べたが、これはそっくりへ

ッペルのケルナー評になるのである。ヘッペルも「特権的少数」のために愛国心を強制する反動的な空気に反対しているのである。ヘッペルの論文は会員の理解を越えていて、「ヘッペルはケルナーに対して不公正だ」（W.IX,S.IV）という反発を招くが、しかしヘッペルは10月15日に手元に戻って来た論文に「付加することも取り去るものも何もない。」（W.IX,S.60）と書く。ホフマンによって不許可にされた詩との日時の近接が目されるのである。

ヘッペル入会後協会では「注目すべきほどしばしばウーラントの詩」（W.IX,S.XIII）が論じられるようになり、ヘッペルもウーラント論を発表したとされる。ヘッペルはヴェッセルブレン時代にウーラントの „Des Sängers Fluch“ を読んで感激し、ウーラントに手紙を書いたことがあったし、1863年にはウーラントを現代の「抒情詩の第一人者」（W.XII,S.343）とたたえている。しかしウーラントに対するヘッペルの共感は、ハイネ同様、「中世のオシアン」⁽⁵⁷⁾としてのウーラントにのみ寄せられているのではない。ボルンシュタインはヴェッセルブレン時代のヘッペルの政治詩に「ウーラントの „Vaterländische Gedichte“ のリベラリズム」⁽⁵⁸⁾の影響を指摘したが、それは „Zum 18. October 1835“ にもあてはまるのである。ヘッペルは「市民の平等と精神の自由のための勇敢な弁士」⁽⁵⁹⁾あるいは「ドイツ国民の自由と統一の主張者」⁽⁶⁰⁾としてのウーラントにも共感を覚えたのである。 „Zum 18. October 1835“ を書くにあたってヘッペルがウーラントの „Am 18. October 1816“ によって「リベラルな考え方をゆるぎなく」⁽⁶¹⁾されたことは十分に考えられることである。

ヘッペルは1832年8月に一連の政治詩をシュッペに送ったことが知られている。これらの詩の中で „Würde des Volks“ は「自由など何の役にも立たない。」（W.VII,S.75）とうそぶく封建君主への警告であり、 „Ein Bild vom Mittelalter“ は飽食と安寧に浸っている国王と聖職者が「ばかな奴隷」（W.VII,S.79）の国民と鋭く対比されている。しかも国民は「よき君主、万歳」（W.VII,S.80）と叫ぶのだ。これらの詩を受け取ったシュッペはヘッペルが自分同様に「リベラルな考えの人」⁽⁶²⁾であることを歓迎する手紙を送り、自分の新聞である „Neue Pariser Modeblätter“ に掲載したのである。シュッペは「大胆な文章を „Modeblätter“ に掲載することを全くためらわなかった。」⁽⁶³⁾という。それ故 „Zum 18. October 1835“ もこの „Modeblätter“ に掲載されるはずではなかったかと考えられる。

1835年とは連邦議会の決議によって若いドイツの活動が禁止された年である。むろん12月10日の禁令は突然に出現したものではなく、「すでに1834年から反体制の作家の出版に際しては誹謗運動が先行していた。」⁽⁶⁴⁾のである。1835年に入って3月にはグツコウの „Vorrede zu Schleiermachers ‚Vertrauten Briefen über die Lucinde‘“（カンペ書店）がハンプルクヤプロイセンで禁止され、4月にはムントの „Madonna. Unterhaltungen mit einer Heiligen“ がプロイセンで禁止された。禁令の直接の契機となったグツコウの „Wally, die Zweiflerin“ が出版さ

れたのは8月のことである。この小説は9月24日にプロイセンで禁止されたのを最初に、以後各国で禁止される。またグツコウがヴィーンバルク（アルトナ生まれ。アルトナもホルシュタイン公国に属していた。）と共に12月1日発刊を予定していて、活動の機関誌となるはずの „Deutsche Revue“ も「政府の圧力」⁽⁶⁵⁾で脱落者が続出し、発行不能に陥いる。ヘッベルが „Zum 18. October 1835“ を発表しようとしたのは、丁度このように状況が頂点に向かって緊迫化していた時期なのである。このような状況化において „Zum 18. October 1835“ のような反動的な風潮に抗議し、プロイセン批判があらわな詩を発表しようとするのは、ヘッベルの政治的立場の表明である。従来のヘッベル像は転換されねばならないのである。

ヘッベルは若いドイツの禁令に「関心は見せなかったようだ。」⁽⁶⁶⁾とは通説である。しかしジョッペのサロンでは「若いドイツやハイネ」⁽⁶⁷⁾のことも話題になったし、政治詩が示しているようにヴェッセルブーレン時代から「きわだって政治的関心」⁽⁶⁸⁾を有していたという説がドイツにもあらわれた。ホルシュタイン公国では1835年から1836年にかけてデンマーク政府による輸出税の強化に対する反対運動が生じた。ホルシュタイン公国を経済的に無理に従属させようとする本国に対する抵抗である。本国の政策に対して公国では「激しい騒動がくり返し」⁽⁶⁹⁾生じ、ヴェッセルブーレンも例外ではなかったという。ヘッベルは反対運動に与し「ドイツへの併合のための熱烈な闘士」⁽⁷⁰⁾であることを示す „Sendschreiben an die Norderdithmarscher von einem Norderdithmarscher in Betreff der Zoll-Angelegenheit“ という公開状を書いてキールの新聞に発表しようとして拒否される。1835年12月末のことである。一連の動きはキールの医師 Hegewisch の文書 „Für Holstein, nicht gegen Dänemark“ (1835) によって再燃したホルシュタイン公国の分離独立をめぐる争いに関連づけることができるのである。またヘッベルはヴェッセルブーレン時代の知人の証言によると、「流れに逆らって泳ぐのが本性だった。」⁽⁷¹⁾という。若いドイツの禁令は第3条で特にハンブルクのカンペ書店を名指しするものだったから、ハンブルクは渦中の町になったわけである。事実ハンブルクには若いドイツ関係の「多くの第2列の人々、追放された運動のマイナー・ポエト」⁽⁷²⁾が滞在していたという。カンペと接触もあったヘッベルが若いドイツをめぐる動きに関心を持たなかったとは考えられないのである。ハンブルクでは若いドイツの禁令は1836年1月に入って公にされた。ヘッベルは1836年初めの日記に「革命が起きてさえドイツ人は税の自由しか戦い取ろうとはしないだろう。思想の自由は決して戦い取ろうとはしないだろう。」(T.140)と書いて、禁令に対する批判的立場とドイツ人に対するいらだちを表明する。反動体制を批判する詩を検閲によって不許可にされ、ホルシュタイン公国の輸出税問題について新聞に公開状を発表しようとしたヘッベルでなければ書くことのできない日記である。 „Zum 18. October 1835“ と同じく、この日記にも „Ein lauter Klang zu vielen stillen“ の趣がある。いずれも「流れに逆ら」う内容だからである。またヘッベルは1839年にミュンヘンからハンブルクに帰還した時グツコウ

と知りあう。そしてグツコウの編集する „Telegraph für Deutschland“ に一連の批評を掲載する。これらの批評文からは若いドイツに対するヘッベルの共感を読み取ることができるので、⁽⁷³⁾ヘッベルは「若いドイツ・グループからはっきりと」⁽⁷⁴⁾区別されることはできないのである。

発見された詩 „Zum 18. October 1835“ はヴェッセルブーレン時代の政治詩に比べてイメージや語法が直截すぎる感がある。それ故ヴェルハウゼンのように「どこから見ても若いヘッベルの本物の詩」⁽⁷⁵⁾という百パーセントの肯定を与えることはためらわれる。しかし内容的には十分な一貫性がある。この詩はヴェッセルブーレン時代の政治詩とテレグラフ論文をつなぐものとして重要である。ジーベルトが通説のヘッベルの非政治性に異論をとなえながら、ヘッベルは「時代の中心的政治・社会問題とはパリで初めて」⁽⁷⁶⁾対決したと考えたのは正しくない。ヘッベルは「時代の中心的政治・社会問題」にはすでにヴェッセルブーレンで関心を示していたのである。またそのことは „Zum 18. October 1835“ が示しているようにヘッベルの第1次ハンプルク時代にもあてはまることなのである。

註

- (1) 使用テキストは Friedrich Hebbel. Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg. von R.M.Werner. Werke は W., Tagebücher は T., Briefe は Br. と省略し、巻数はローマ数字、ページ数はアラビア数字で示す。日記は番号で示す。
- (2) T.107の Werner の注解。
- (3) 拙論「ヘッベルの政治詩について、——1832年成立のものを中心として——」[山形大学紀要（人文科学）第11巻第1号、1986、参照。]
- (4) Barbara Wellhausen: Ein verschollenes Hebbel-Gedicht—der Fund und der Echtheitsnachweis. [In: Hebbel in Wesselburen. Hrsg. von Barbara Wellhausen. Heide (Boyens) 1986, 参照。]
- (5) Heinz Stolte: Literaturbericht. [In: Hebbel-Jahrbuch 1988. Heide (Boyens) 1988, S.138.]
- (6) Chronik der Deutschen. Dortmund (Chronik-Verlag) 1983, S.476.
- (7) Ludwig Börne: Briefe aus Paris. Frankfurt (Insel) 1986, S.44.
- (8) Thomas Nipperdey: Deutsche Geschichte 1800—1866. München (Beck) 1983, S.83.
- (9) Ludwig Uhland: Werke. Hrsg. von H.Fröschle und W.Scheffler. München (Winkler) 1984, Bd. 1, S.69.
- (10) Heinrich Heine: Werke und Briefe. Berlin (Aufbau) 1980, Bd.4, S.376.
- (11) Wolfgang Hädecke: Heinrich Heine. München (Hanser) 1985, S.299.
- (12) Heinrich von Treitschke: Deutsche Geschichte im neunzehnten Jahrhundert. Königstein (Athenäum) 1981 (1912/13), 2. Teil, S.312.
- (13) Uhland: a.a.O., Bd.1, S.69.

- (14) Wellhausen: a.a.O., S. 98.
- (15, 16) Wellhausen: a.a.O., S. 99.
- (17, 18) Wellhausen: a.a.O., S. 100.
- (19) Gerhard Höhn: Heine-Handbuch. Stuttgart (Metzler) 1987, S. 178.
- (20) Heine: a.a.O., Bd. 3, S. 153.
- (21) Höhn: a.a.O., S. 179.
- (22) Wellhausen: a.a.O., S. 100.
- (23) Hans-Wolf Jäger: Das Naturbild als politische Metapher im Vormärz. [In: Zur Literatur der Restaurationsepoche 1815–1848. Hrsg von J. Hermand und M. Windfuhr. Stuttgart (Metzler) 1970, S. 405.]
- (24) Jäger: a.a.O., S. 408.
- (25) Nipperdey: a.a.O., S. 278.
- (26) Margarete Kramer: Die Zensur in Hamburg 1819 bis 1848. Hamburg (Buske) 1975, S. 97.
- (27) Volkmar Eichstädt: Die deutsche Publizistik von 1830. Vaduz (Kraus) 1965 (1933), S. 94.
- (28) Edda Ziegler: Literarische Zensur in Deutschland 1819–1848. München (Hanser) 1983, S. 132.
- (29) Treitschke: a.a.O., 5. Teil, S. 751.
- (30) Ziegler: a.a.O., S. 9.
- (31) Heine: a.a.O., Bd. 3, S. 162.
- (32) Heinz Stolte: Wilhelm Hocker, Dichter und Rebell aus dem hamburgischen Vormärz. [In: Hebbel-Jahrbuch 1977, S. 53.]
- (33) Wellhausen: a.a.O., S. 107. 参照
- (34) Heine: a.a.O., Bd. 4, S. 60.
- (35) Kramer: a.a.O., S. 304.
- (36) Kramer: a.a.O., S. 140.
- (37) Kramer: a.a.O., S. 141.
- (38) Heine: a.a.O., Bd. 5, S. 205.
- (39) Kramer: a.a.O., S. 143.
- (40) Wellhausen: a.a.O., S. 107.
- (41, 42) Gert Ueding: Hoffmann und Campe. Hamburg (Hoffmann und Campe) 1981, S. 310.
- (43) Ueding: a.a.O., S. 365.
- (44) Kramer: a.a.O., S. 162.
- (45) Stolte: Hocker, S. 29.
- (46) Joseph A. Kruse: Heines Hamburger Zeit. Hamburg (Hoffmann und Campe) 1972, S. 317.
- (47) Stolte: Hocker, S. 49.
- (48, 49) Kramer: a.a.O., S. 306.
- (50) Kramer: a.a.O., S. 318.
- (51, 52) Astrid Stein: Friedrich Hebbel als Publizist. [In: Hebbel-Jahrbuch 1989, S. 147.]
- (53) Theodor Körners sämtliche Werke. Hrsg. von Karl Streckfuß. Berlin 1838, Bd. 1, S. LXIVf.

- (54) Treitschke: a.a.O., 4. Teil, S. 542.
- (55) Emil Kuh: Biographie Friedrich Hebbels. Wien 1877, Bd. 1, S. 207.
- (56) K.W.L. Solger: Nachgelassene Schriften und Briefwechsel. Heidelberg (Schneider) 1973 (1826), Bd. 1, S. 600.
- (57) Heine: a.a.O., Bd. 5, S. 146.
- (58) Hrsg. von Paul Bornstein: Der junge Hebbel. Berlin 1925, Bd. 2, S. 253.
- (59) Heine: a.a.O., Bd. 5, S. 146.
- (60) Uhland: a.a.O., Bd. 4, S. 934 (Nachwort des Herausgebers)
- (61) Wellhausen: a.a.O., S. 109.
- (62) Hrsg. von Bornstein: a.a.O., Bd. 1, S. 189.
- (63) Kurt Schleichert: Das Leben der Amalia Schoppe und Johanna Schopenhauer. Darmstadt (Turris) 1978, S. 255.
- (64) Ziegler: a.a.O., S. 75.
- (65) Erwin Wabnegger: Literaturskandal. Würzburg (Königshausen und Neumann) 1987, S. 110.
- (66) Walter Vontin: Hebbels Hamburg. [In: Hebbel-Jahrbuch 1963, S. 184.]
- (67) Paul Bornstein: Hebbels Persönlichkeit. Berlin 1924, Bd. 1, S. 44.
- (68) Stein: a.a.O., S. 145.
- (69) Astrid Stein: Friedrich Hebbel als Publizist. Münster (Lit Verlag) 1989, S. 31.
- (70) Stein: im obengenannten Buch, S. 174.
- (71) Kuh: a.a.O., Bd. 1, S. 207.
- (72) Ueding: a.a.O., S. 313.
- (73) 拙論「ヘッベルのテレグラフ論文、——同時代の文学とのかかわりにおいて——」〔「ドイツ文学」72号, 1984, 参照。〕
- (74) Friedrich Sengle: Biedermeierzeit. Stuttgart (Metzler), Bd. 3 (1980), S. 355.
- (75) Wellhausen: a.a.O., S. 109.
- (76) Horst Siebert: Friedrich Hebbel—Anpassung und Widerstand. [In: Hebbel-Jahrbuch 1970, S. 48.]

(1990年9月1日受理)

Über ein neulich gefundenes Gedicht Friedrich Hebbels

— „Zum 18. October 1835“ —

Atshushi Okumura

(Fachabt. Deutsch, Fakultät für Allg. Bildung)

Hebbel trug am 19. Oktober 1835 in sein Tagebuch ein: „Als dem Zensor Hoffmann ein Gedicht von mir: „zum 18 Okt: 1835“ vorgelegt wurde, gab er es dem Buchdrucker entrüstet mit den Worten zurück: „wie kann die gute Frau (die Dokt: Schoppe) glauben, daß ich *solche* Gedichte passieren lasse!““(T.107) Hebbel wollte ein Gedicht veröffentlichen und bekam kein Imprimatur. Nach Werner sei dieses Gedicht nicht erhalten. Es war lange Zeit der Hebbel-Forschung vorenthalten.

Dieses verschollene Gedicht ist 1986 von Barbara Wellhausen „gefunden“ worden. Heinz Stolte hat es dann als „ein bisher verschollenes Hebbel-Gedicht“ bestätigt. Hier soll dieses Gedicht untersucht und ein neues Licht auf das politische Bewußtsein des jungen Hebbel geworfen werden.

Das Gedicht heißt: „Zum 18. October 1835“. Als Untertitel: „Ein lauter Klang zu vielen stillen“. Dann folgt als „Motto“ die erste Strophe von einem Gedicht Uhlands, „Am 18. Oktober 1816“, das „das radikalste Gedicht seiner politischen Gedichte“ (Treitschke) sei. Erst dann beginnt das Gedicht Hebbels.

In diesem Gedicht nannte Hebbel das Volk „Knecht“, der „Menschenrechte“ „aufs Neue schimpflicher verloren hat“ und klagt: „Und doch erwacht kein fürstliches Gewissen?“ In der vierten Strophe tritt Napoleon ein als „Weltenrichter“ und als Reformers, der „nur in die Welt getreten ist, um sie zu verändern“ (T.4887) Hebbel ruft in der letzten Strophe die Fürsten auf: „Euch hat .../Für Freiheit die Begeisterung gerettet—/Welch Teufelsspiel hat euch denn so verblendet,/ daß ihr der Retterin im Kerker bettet?“ Dieser Vorwurf traf besonders den preußischen König, weil sein Aufruf „An mein Volk“ im ganzen Deutschland eine patriotische Begeisterung ausgelöst hatte und zum Sieg bei der Völkerschlacht bei Leipzig führte, die vom 16. Oktober 1813 an vier Tage geschlagen wurde. Man feierte den 18. Oktober als Jahrestag des Sieges. Aber für die Freiwilligen, die

nicht auf den König, sondern auf das deutsche Vaterland vereidigt waren, war klar, das Versprechen des 13. Artikels der Bundesakte zu erfüllen. Doch die Fürsten hielten das Versprechen, eine „landständische Verfassung“ einzurichten, nicht. Inzwischen spannte sich die politische Lage und wurde 1819 die Karlsbader Beschlüsse gefaßt. Auch in Hamburg war die Zensurlage nicht besser. Auch hier wurden „etwa konträre politische Richtungen im Keim“ erstickt. Das kann man an einem Fall des Pastors J.W.Rautenberg sehen. Rautenberg, der „gegen die restaurative Tendenz“ kämpfte, kritisierte 1828 in einer Predigt die Hamburger Regierung. Es gelang ihm, diese Predigt drucken zu lassen, infolge eines Versehens des Zensors Hoffmann. Hoffmann wurde deswegen mit der Entlassung gedroht. Rautenberg beschwerte sich 1829 beim Senat wegen der Zensur der Predigttext, die das Hamburger Volk an der Feier des 18. Oktober teilnehmen zu lassen versuchte. Heine hat in der „Vorrede“ zu den „Französischen Zuständen“ das gebrochene Versprechen aufgezeigt und den Preußischen König scharf kritisiert. Daß diese „radikale“ „Vorrede“ zum 18. Oktober 1832 datiert ist, kann nicht genug betont werden.

Die Unterdrückung gipfelte im Verbot des Jungen Deutschlands vom 10. Dezember 1835. Gerade in dieser Zeit, wo die Lage sich in der Richtung des Verbots spannte, wollte Hebbel das Gedicht „Zum 18. October 1835“ veröffentlichen. Es war an sich politisch, in einer solchen Situation ein derartiges Gedicht zu veröffentlichen. Aber eine Reihe von „politischen Gedichten“ entstand schon in Hebbels Wesselburener Zeit. Paul Bornstein sah in einem dieser Gedichte „den Einfluß des Uhlandschen Liberalismus“ der „Vaterländischen Gedichte“. Das gilt auch für andere Gedichte Hebbels. Hebbel zeigte mit „Zum 18. October 1835“ seine Sympathie für Uhland, der „ein Freund deutscher Volksfreiheit und deutscher Nationaleinheit“ war, und auch seine oppositionelle politische Haltung. Es ist durchaus möglich, daß Hebbel vom Gedicht Uhlands, „Am 18. Oktober 1816“, seine „liberale Vorstellung gefestigt“ (Wellhausen) und zu seinem Gedicht angeregt wurde. Aber das Fest des Jahrestags der Völkerschlacht bedeutete damals „den beißendsten Hohn auf das System Metternichs“. Wie sollte Hoffmann ein solches Gedicht drucken lassen? In Hamburg blieb der 18. Oktober ein politisch heikles Problem, wie der Fall Rautenbergs und später ein Zeitungsartikel über das Festmahl des Jahres 1846 zeigen.

Der Ansatz von Wellhausen, daß „Zum 18. October 1835“ „ein ganz und gar echtes Jugendgedicht Hebbels“ sei, sollte unter einem Vorbehalt angenommen werden, weil das Gedicht im Gegensatz zu Hebbels frühen politischen Gedichten sowohl im Image als im Wortlaut zu direkt ist. Doch es ist möglich, es zu ihnen zu zählen. Daher soll ein Urteil

von Horst Siebert, nach dem Hebbel „mit den zentralen politischen und sozialen Auseinandersetzungen seiner Zeit erst in Paris ... konfrontiert“ worden sei, endlich beseitigt werden. Das Gedicht „Zum 18. October 1835“ ist „ein lauter Klang“ Hebbels im reaktionären Zustand.